不可知論者、弁証法的唯物論、相対的真理と絶対的真理

不可知論者

アグノスティク〔不可知論者〕というのはギリシア語であって、アはギリシア語で**不**を、グノーシスは**知識**を意味する。不可知論者は言う、私は、われわれの感覚によって反映され模写される客観的実在があるかどうかを知らない、私は、それを知ることは不可能であると宣言する、と（不可知論者の立場を叙述したエンゲルスの前記の言葉を見よ）。ここから、不可知論者による客観的真理の否定と、森の精、家の精、カトリックの聖者、そのほかこれに類する物についての教えにたいする寛容、町人的な、俗物的な、臆病な寛容とが出てくる。　　第 14 巻 P147~148『唯物論と経験批判論』　　1908 年後半に執筆

弁証法的唯物論

……したがって、自然科学は「**物質の統一性**」へと導いていく――これが、物質の消滅、物質の電気での置換、等々という、あれほど多くの人々を混乱させている言葉の現実的内容てある。「物質が消滅する」ということは、これまでわれわれが物質をそこまで知っていたその限界が消滅するということであり、われわれの知識がいっそう深くすすむことである。かっては絶対的で、不変で、根源的とおもわれていたような物質の性質（不可入性、慣性、質量等々）は消滅し、いまではこれらの性質は、相対的な、物質の若干の状態にだけそなわっているものであることがあきらかになっている。なぜなら、物質の**唯一**の「性質」――哲学的唯物論は、それを承認することとむすびついている――は、**客観的実在である**という性質、すなわちわれわれの意識のそとに存在するという性質だからである。

……唯一の正しい観点､すなわち弁証法的唯物論の観点から問題を提起するためには、電子、エーテル**等々**は人間の意識のそとに、客観的実在として存在するか、しないか、と問わなければならない。この問題にたいして自然科学者は、ためらうことなく**然り**とこたえるにちがいないし、またたえずそうこたえている、それはちょうど、人間や有機物質以前の存在を彼らがためらうことなくみとめているのと同様である。そして、このことによって、問題は唯物論に有利に解決される。なぜなら、われわれがすでに述べたように、物質の概念は、認識論的には、人間の意識から独立して存在し、そして人間の意識によって模写される客観的実在**以外のなにものをも**意味しないからである。

しかし、弁証法的唯物論は、物質の構造とその性質にかんするあらゆる科学的命題の近似的・相対的性格を主張し、自然には絶対的な境界がないこと、運動する物質が一つの状態から、われわれの観点から見ると外見上それと和解しがたい他の状態に転化すること、などを主張する。重さのないエーテルが重さのある物質に、またその逆に、転化することが「常識」の観点からはどんなに驚くべきことであっても、電子には電磁的質量以外にいっさい質量がないということがどんなに「奇妙な」ことであっても、力学的な運動法則が自然現象のただ一つの分野だけにかぎられ、それが電磁現象のいっそう深い法則に従属しているということなどがどんなに異常であっても、――これはみな、弁証法的唯物論をい

ま一度確証するものにほかならない。　　第 14 巻 P314~315『唯物論と経験批判論』

ポイント

物質の概念は、認識論的には、人間の意識から独立して存在し、そして人間の意識によって模写される客観的実在以外のなにものをも意味しない。

弁証法的唯物論は、物質の構造とその性質にかんするあらゆる科学的命題の近似的・相対的性格を主張し、自然には絶対的な境界がないこと、運動する物質が一つの状態から、われわれの観点から見ると外見上それと和解しがたい他の状態に転化すること、などを主張する。

相対的真理と絶対的真理

物理学の古い真理は、争う余地のない不動のものとみなされていたものにいたるまで、すべて相対的真理であることがわかる、――**したがって**、人類から独立したいかなる客観的真理もありえない。マッハ主義全体だけでなく、「物理学的」観念論全体が一般にそう論じている。発展していく相対的真理の総和から絶対的真理が形成されること、相対的真理は人類から独立した客観の相対的に正しい映像であること、これらの映像はますます正しくなっていくこと、おのおのの科学的真理のうちには、その相対性にもかかわらず、絶対的真理の要素かあること、――これらの命題はみな、エンゲルスの『反デューリング論』について考えたことのある者にはだれにも自明のことであるが、「現代の」認識論にとっては七つの封印をおされた書物のようなものである。

……エンゲルスは、主観主義に転落する相対主義をとるためにではなく、弁証法的唯物論をとるために、古い形而上学的唯物論を拒否した。……諸君が客観的実在の承認を拒否せず、反弁証法的なものとして形而上学とたたかうならば、それは正しい。スタッロはこのことをはっきり自覚していない。唯物論的弁証法を彼は理解しなかった。そしてそのために、彼はしばしば相対主義を通じて主観主義と観念論に転落している。

第 14 巻 P374~375『唯物論と経験批判論』

ポイント

発展していく相対的真理の総和から絶対的真理が形成される。相対的真理は人類から独立した客観の相対的に正しい映像であること、これらの映像はますます正しくなっていくこと、おのおのの科学的真理のうちには、その相対性にもかかわらず、絶対的真理の要素かあること、これが私たちの認識論である。